

英国南部の墓地の変化と宗教的態度

稲田道彦

- I. はじめに
- II. イングランドの墓地と墓の歴史
 - (1) 墓地の種類
 - (2) 葬法と墓の種類
- III. 墓地が変化する社会背景
 - (1) 火葬の導入
 - (2) ヴィクトリア時代
- IV. 南イングランドの墓地の変化
 - (1) ブライトン市の事例
 - (2) ファルマーの事例
- V. 宗教への態度の変化
 - (1) 宗教離れ
 - (2) 死の排除と環境問題
- VI. まとめ

墓は石などの永続性のある素材で作られることが多いため、長期間保存され、多くが現在も存続している。本報告では、最近約150年間の墓地の変化を中心に、主に庶民の墓に焦点を当てて述べる。それ以前の例えば1600年代、1700年代に建てられた墓も各地の墓地の中に見ることができる。しかし、この年代で墓石を残している人は、地方においても庶民というよりも社会的に上層に属する人の方である。それ以前の墓を墓地で見る機会は極端に少なくなる。今に存続している墓地を、古代の墓地へ歴史的につなげて考えることは、さらに別種の発掘や聞き取りによる民俗や宗教の調査をしなければならないと考えている。

I. はじめに

本稿では、英国の墓地の変化を題材にして、その背後にある宗教意識の変化を考えることを意図している。最初に、現象として把握できる英国の墓地の変化を述べる。次に、筆者の調査した英国南部の墓地の事例を報告する（北部のスコットランドは墓地の制度や形態はほとんど同じであるが、火葬の導入等に若干の差があるので、英国南部またはイングランドという地域名を用いる）。最後に、墓地の変化の背後にある、宗教に関して人々が共有している社会心理とも言うべきものについて述べたい。

II. イングランドの墓地と墓の歴史

(1) 墓地の種類

英国でも墓は墓地に集められている。ここでは、どういう団体が墓地を所有・管理しているかという点で墓地を分類する。

古くから最もよく見かける形式は、教会の中庭に教区民を葬ると言う形式の churchyard である。英国国民の多くは信徒たる英国国教会の教会システムにのっとり、地域と密接な関係を持つ教区教会 (parish church) に葬られた。宗教宗派が埋葬者の大きな分類原理であり、同じ地域に住んでいても別の宗派の教会組織の者、例えばカトリック教徒は別の場所

にあるカトリック教会の教会墓地に葬られた。人口の多い町にはバプテストやクエーカーなどの教会があり、その中庭にも墓石が建てられ教会墓地が営まれた。英国国教会の教会墓地では、また幾分か差別的な埋葬が行われることもあったと言われる。自殺者、売春婦、私生児などの埋葬は断られたり、一部の限られた場所に葬られたとされるが、その実例は目にしなかった。現在では、教会の庭への埋葬はほとんど行われていない。共同墓地、公営墓地などへ埋葬場所が移動したのが大きな理由である。

英国には会社が経営する墓地がある。死者は永続的に出現するので、新規墓地の供給とその管理や補修を業務とするビジネスが有望と考えられ、1800年代に登場した。主に裕福な社会層へのサービス提供を目的としている。しかし現在では、多数の会社が破産し解散した。墓地、墓石、葬法に関する英国国民の意識や態度が変化したことがその背景にある。今も存続している墓地会社は火葬場経営を中心にし、土葬を望む人々に土地を供給する形で経営を存続させている。

会社経営の墓地に遅れて、地方公共団体が開設する墓地が出現した。これは特定の宗教や所得の高低に偏らないで、市民なら誰でもそこに埋葬してもらえる墓地である。その他にユダヤ人など固有の民族の墓地があった。さらに、教会墓地を離れて教区民の組織が墓地を開設することもあった。農村部に設立された墓地のいくつかは、住民組織が地主から土地を寄付してもらった形で開かれたものである。

(2) 葬法と墓の種類

英国人がどんな墓を造ってきたのかという点に関して、いくつかの墓の種類をあげることができる。一般市民が葬られる教会墓地では、土葬が主流であった。古くからある最も簡単な墓の形式は、埋葬場所を木の枠で囲

み、中に木の十字架を立てるものである。同様に墓石を載せた墓も数が多い。手の込んだ彫刻を施した豪華な墓石を作ることもあった。

さらに、オランダから入ってきた習慣といわれているが、その集落社会の中で上層に位置する一族は教会の内部に墓所を設けた。説教壇の脇を小さな壁でしきり、窪みの空間を作って、その中に棺を積み上げた。棺は飾りを彫り付けた石の棺が多かった。その前には柵を設けて、立ち入れないようにしていた。また教会の壁の中に墓石を塗り込めたり、教会の床の敷石が同時に墓碑銘を刻んだ墓石であるような形をなした。ロンドンのセントポール大聖堂やウエストminster寺院では、この種の有名人の墓を多く見ることができる。地方でも古い教会には、それと同じ形式の墓所を今も見ることができる。

さらに、上流の家族が教会の中に棺を積み上げる形式をとったことの連想から生じた形式だと思われるが、墓地内に地下の穴を掘り、その中の空間に棺を積み上げる形式をとっているところもある。後述するファルマー集落の教会の墓地で聞いた事例だが、かなり広い地下空間を造り、そこに棺を安置する方法をとっているという。また壁龕墓地という形式が作られた。これは、多くの場合、穴蔵のような地下または半地下空間を造り、その中に柵を築き、柵の上に遺骸を入れた鉛・石・木製の棺を整然と積み上げ保管する。葬法の分類に従えば、これらは土葬ではなく、安置葬または風葬という言い方ができる。

火葬は新しく導入されたものである。英国の火葬と墓地に関する年表を表1に示した。1874年に、ヴィクトリア女王の軍医だったSir Henry Thompsonが“Cremation: The Treatment of the Body after Death”を著し、英国火葬協会を設立した。1885年には最初の火葬場が建設された。英国の火葬は現代日本の火

表1 英国とブライトン市の墓地に関する年表

A. 英国の火葬・墓地史に関わるできごと	
1848	Public Health Actの施行
1849	Edward Cresy's Report
1853	Burials beyond the Metropolis Act
1874	英国火葬協会の創立
1884	火葬法の制定
1952	Cremation Act
B. ブライトン市の墓地に関わるできごと	
1824	St. Nicholas Churchyardの北側に新墓地を造成する
1825	Jewish Cemeteryの開設
1840	St. Nicholas Churchyardの西側に新墓地を造成する
1851	Brighton Extra Mural Companyの創立と墓地の開設
1853	St. Nicholas Churchyardの廃止と移転
1854	Lewes Road Cemeteryの開設
1868	Bear Road Cemeteryの開設
1930	Woodvale Crematoriumの開設
1941	Downs Crematoriumの開設

葬方法と違い、高温でなるべく遺骸を燃やし尽くしてしまう方法がとられた。骨灰も粉砕して、できるだけ少容量の灰にしてしまう。壺に入れて柵状の安置所に置いておくと、今庶民に一番多く採用されているのは、火葬場に付属して作られている花壇の花の下などに埋める方法である。残す灰の容積が小さいので、小さなプレートを立てたり、石のプレートが置かれたりするだけである。さらに、人に座って故人をしのんでもらいたいとの意図から、ベンチの下や石壁の石の中にも埋め込まれている。芝生の中や森林の樹木の下に骨灰を散布する事例もある。骨灰をばらまくだけの葬法をとる場合は、故人の名前を記した墓碑が残らない。花壇の下への埋葬や骨灰の散布の場合も含めて、故人が生きてきたことを示す墓石の機能は、小さなチャペルの中に置かれた本に託されている。この本は“A Book of Remembrance”といい、その中に飾り文字で氏名と誕生日、死亡日が記入してある。毎日その日に当たるページが開かれている。

以上のように、英国で一般的に見られる葬法は、土の中に埋めてしまう土葬、限られた空間の中に棺を積み上げておく風葬とも言う

べき方法、そして火葬である。火葬骨の処遇は上に述べた幾つかの方法がとられている。

Ⅲ. 墓地が変化する社会背景

(1) 火葬の導入

火葬が導入されるきっかけの一つは衛生思想であると考えられている。顕微鏡の発明による病原菌の発見が、病気が伝染することを意識させ、死も伝染するのではないかという不安が生じたという。その結果、死体への接近を忌避する風潮が育った。また、ロンドンでは地方から移住してきた労働者の死体が埋葬の許容量を超え、教会墓地に収容しきれなくなっていた。教会の中庭は、不十分な埋葬の死体があふれている状況であったという。都心にある墓地を郊外に移転せよという1849年のEdward Cresyのレポートが提出され、1853年に王室が法令を出す形で、都心に墓地を建設することを禁じるとともに、郊外への墓地の移転を命じた。この動きと連動して、1874年に火葬を行うことを考える人々の協会が設立され、1884年に火葬の方法を定めた法律が作られた。

しかし、一般的に当時の人々は火葬に対して忌避感を持っていた。理由としては、キリスト教の復活思想に反すること、火刑が重犯罪者に対する刑罰であったこと、死者を大切に考える当時の庶民感覚に反していたことがあげられる。火葬は、細々と進歩的な思想を持った人々の間で続けられた。

第2次世界大戦をきっかけにして、火葬が急激に増加する傾向を示した。一度に大量の死者が出現し、火葬を選択せざるを得ない状況が出現したこと、戦死した兵士の遺骸が火葬され、自分たちの生活の範囲に火葬がありふれたものになったことで、忌避感が薄れたと考えられる。その後英国政府は火葬が環境に優しい葬法と認めて補助金を出し、火葬は割安な葬法として定着している。

(2) ヴィクトリア時代

ヴィクトリア時代は、英国人が立派な墓を作ることにエネルギーを費やした時代であった。この時代は、植民地から富が英国に集まる時代でもあった。亡き夫を偲ぶことにヴィクトリア女王（1819～1901年）は異常に固執したという。アルバート公の死（1861年）を悼んで、12年もの喪に服したと伝えられている。毎日黒い服を着て、楽しみの場には同席せず、最少の公務をこなす他は家の奥に引っ込み、家族とのひっそりとした生活を行ったと伝えられている。女王の生活態度は周辺に伝わり、多くの人が肉親の死を大切なものと考え、喪に服し立派な墓を建てることを重大なことと受けとめた。庶民がGood Deathという考えにとりつかれた。このことは、後に墓地会社が設立される時に、死を扱うビジネスが重要なサービス産業になると考えられた一つの背景であると思われる。

IV. 南イングランドの墓地の変化

(1) ブライトン市の事例

次にここでは、私が調査したブライトン（Brighton）周辺の墓地の変遷を述べる（図1、図2）。まずブライトンの教会墓地は、図2中の1の場所、St. Nicholas教会にあった。この教区教会中庭の墓地が手狭になったため、1824年と1840年に教区民の団体が周辺に2ヶ所の土地を入手し、墓地を造成した。これらの墓地で将来のブライトン市教区民の死者埋葬地をまかなおうと考えていた矢先、都心から墓地が移転するようという法律が1853年に公布された。それで、教区民の団体は地図上の3の地点に墓地を新しく購入して教区民の墓地にした。1854年のことある。

同時期に周辺に幾つかの墓地が開かれた。図2の2の墓地は、1850年に発足した墓地会社が経営する墓地Brighton Extra Mural Cemeteryである。近くの4の墓地は、ブライトン市にある他の教会の教区民墓地であった。



図1 ブライトン市とファルマーの位置

6は1825年に設立されたユダヤ人墓地であり、5は1868年設立のブライトン市営墓地である。

会社経営の墓地はブライトン市の上層階級を顧客にし、贅をつくした墓石を建てた。墓の建立とメンテナンスの料金を徴収することで会社が経営された。この会社の名前にあるmuralは壁龕のことで、坂の下に穴を掘り、中を棺の収納庫とした。後にこの会社は経営に行き詰まり、ブライトン市に資産を譲る代わりに墓地経営を引き継いでもらった。教区民の墓地だった3の墓地も、現在ではブライトン市に経営をゆだねている。4の教区民墓地も経営に行き詰まったが、アメリカ資本の葬儀会社を買収され現在に至っている。

この葬儀会社は、1941年に建設した火葬場を運営しながら、土葬希望者には土地を貸すという方式で経営を続けている。3の墓地に

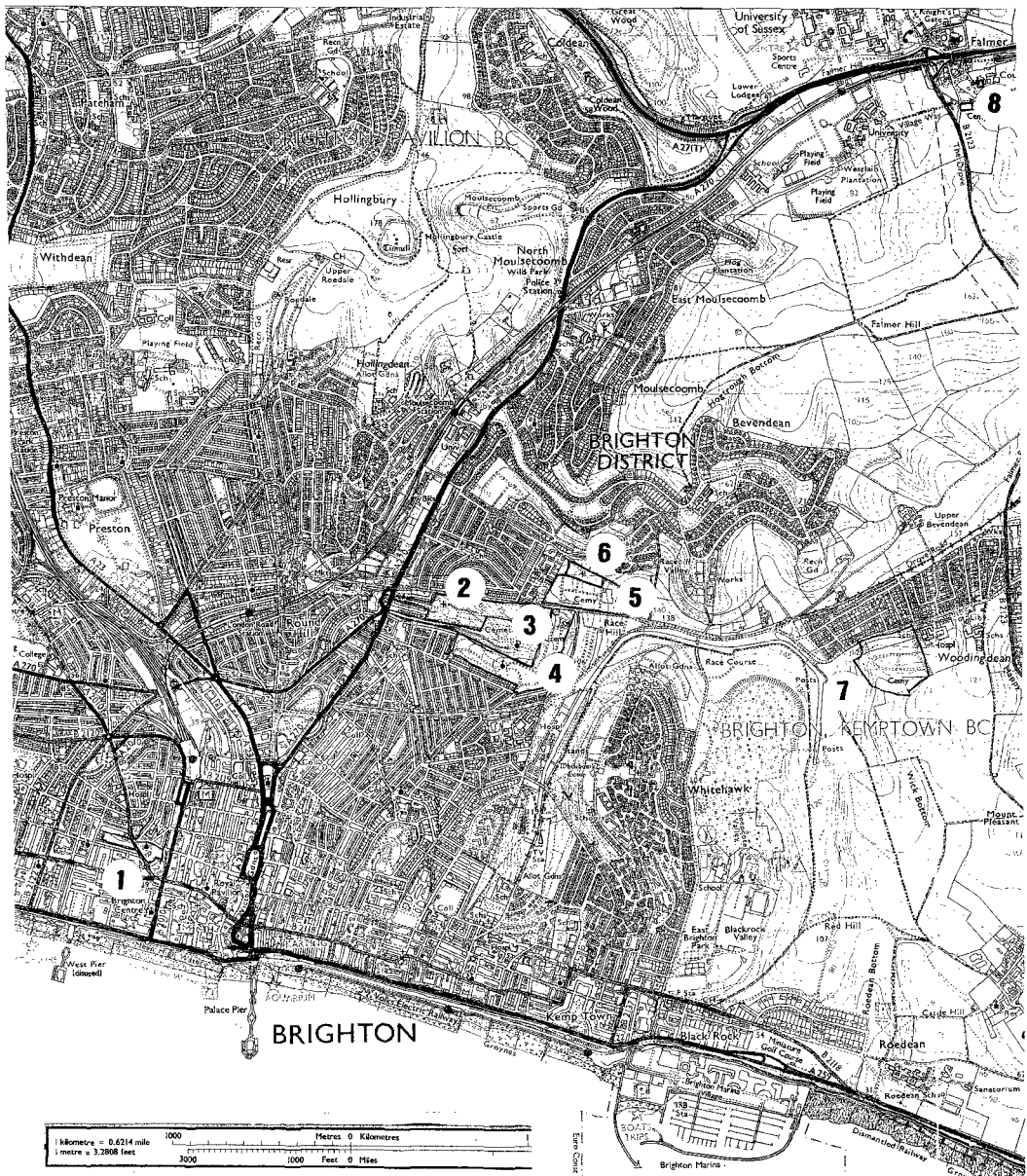


図2 ブライトン市の墓地配置

- 1 St. Nicholas Churchyard (?-1853, 1824-1853, 1840-1853)
- 2 Brighton Extra Mural Cemetery (1851-)
- 3 Lewes Road Cemetery (1854-)
- 4 Brighton & Preston Cemetery (1885-)
- 5 Bear Road Cemetery (1868-)
- 6 Jewish Cemetery (1825-)
- 7 Lawn Memorial Cemetery (?-)
- 8 Falmer (churchyard ? - , cemetery ? -)

表2 ファルマーの教会墓地と共同墓地にある墓の建立年代

年	教会墓地	共同墓地	火葬
1700			
1			
2			
3			
4			
5			
6	1		
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29	1		
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46	1		
47			
48			
49			
50			
51			
52			
53			
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			
61			
62			
63			
64			
65	1		
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75	1		
76			
77			
78			
79			
80	1		
81	1		
82	1		
83			
84			
85			
86			
87			
88			
89			
90			
91			
92			
93			
94	1		
95			
96	1		
97			
98	1		
99			

年	教会墓地	共同墓地	火葬
1800	1		
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7	3		
8	1		
9			
10	2		
11			
12			
13	1		
14			
15	3		
16	1		
17			
18			
19	1		
20			
21	1		
22			
23			
24			
25	2		
26			
27	6		
28			
29			
30	1		
31	2		
32	2		
33			
34	1		
35	1		
36	4		
37			
38			
39			
40	1		
41	2		
42			
43			
44	1		
45	3		
46	1		
47			
48			
49			
50	1		
51	2		
52			
53			
54			
55	2		
56			
57	4		
58			
59			
60	4		
61			
62	1		
63			
64	2		
65	1		
66	3		
67	1		
68	3		
69	5		
70	5		
71	5		
72			
73			
74	4		
75	1		
76	3		
77	1		
78	2		
79	5		
80	4		
81	7		
82	5		
83	1		
84	3		
85	2		
86	1		
87	5		
88	1		
89	1		
90	2		
91	7		
92	2		
93			
94	3		
95	2		
96			
97	1	1	
98			
99	2		

年	教会墓地	共同墓地	火葬
1900	2	3	
1	1	1	
2	3	1	
3	1	1	
4	1	4	
5			
6			
7	1	3	
8	1	1	
9	1	3	
10	1	4	
11		4	
12		1	
13		3	
14		1	
15		2	
16			
17		1	
18		1	
19	1	1	
20		1	
21		1	
22		2	
23		1	
24			
25			
26		3	
27		2	
28		2	
29		2	
30		2	
31		5	
32		8	
33		1	
34		5	
35		5	
36		2	
37		2	
38		2	
39	2	2	
40		3	
41		3	
42		3	
43		3	
44		5	
45		3	
46		3	
47		1	
48		5	
49		2	
50		5	
51		2	
52		3	
53		7	1
54		2	
55		3	
56	1	5	
57		1	
58		3	
59		1	
60		4	
61		2	
62		7	
63		5	
64		3	
65		5	1
66		2	
67		2	
68		2	
69		4	
70		4	
71	1	7	
72		2	
73		6	
74		6	
75		3	
76			
77			
78		3	
79			
80		3	
81	1	4	
82			
83		1	1
84			
85			
86			4
87			2
88			1
89		2	1
90		1	1
91		2	1
92		3	1
93		2	6
94		1	4
95	1	2	6
96		2	2
97	1	2	3
98		2	4
99		5	1
2000			1

も、1930年に設立され現在市営の火葬場があるが、市営の火葬場は環境に優しい火葬をということで、簡素な葬儀、例えば棺には段ボールを使おうという働きかけや、火葬骨灰を散骨し林に戻すという運動を行っている。一方、会社経営の火葬場では火葬骨を埋める記念庭園を用意し、かなり手入れをしている。何人もの園丁が年中花をきらさないようにし、庭園を常に美しい状態に維持するという形で、市営火葬場との差別化を図っている。

図2の7の墓地は、第2次世界大戦後かなり最近になって作られた土葬用の市営墓地である。火葬に比べ割高であるが、今もって土葬を希望する人に供用されている。

(2) ファルマーの事例

ファルマー (Falmer) はブライトン市に含まれる一集落 (図2の8) である。ブライトン市の墓地が都市内部にあり、都市住民のための墓地の様相を呈しているのに対し、こちらは農村の墓地である。この集落には現在、2ヶ所の墓地がある。教会の中庭の墓地と、別の場所に新しく作られた共同墓地である。2つの間は50メートルぐらい離れている。以前はもっぱら教会墓地に葬られていたが、現在では共同墓地への埋葬に変わってきている。

2つの墓地にある墓石に彫られた内容を全部調べる形で、2つの墓地に葬られている人を調査した。表2に、墓石に書かれた死亡年代を示した。火葬による共同墓地の墓は3番目の欄に記した。

教会墓地で一番古い死亡年は1706年である。1700年代は少ないながら埋葬が続けられ、1800年代になって墓石の建てられる数が増加している。共同墓地では1897年に最初の死者が葬られる。住民はそれ以降、両墓地を併用して使っているが、1910年以後は教会墓地への埋葬が激減する。農村の墓地において

も教会の庭への埋葬が終了し、教会墓地から共同墓地への埋葬に移行したようである。火葬による墓は1953年、1965年と続き、1986年頃からは毎年火葬による墓が見られるようになる。ブライトン市内では法令が出されて早い時期に教会墓地の使用から郊外墓地の使用に移ったのに対して、農村では教会の中庭への埋葬がかなり続いたことを示している。また、火葬の導入もかなり遅れて始まったことが分かる。

V. 宗教への態度の変化

(1) 宗教離れ

明確な統計を得ることができなかったが、私が体験した印象からいうと、南イングランドでは庶民の教会離れが進行している。墓地の調査をしているファルマーの教会で、墓の台帳をミサの間だけ見せてくれるという約束ができ、毎日曜日に通った。日曜日、教会の一番後ろの席から見ると、教会に来る人数が非常に少ないと感じた。教会の前には大きな池があり、そこに野鳥が飛来してきた。村の人は日曜日、池のそばに来て、ベンチに座って鳥に餌をやりながらのんびりした時間を楽しんでいるが、教会の中に入りミサに参加する人は少数だった。知り合いと出会って親しい挨拶をしても、教会に入る人とそうでない人とは歴然としていた。「おつきあい」で教会のミサに参加するという意識はお互いに全くないようだった。教会へは個人の明確な意識に従って参列するという印象である。日本では宗教が「おつきあい」の要素をもっていることと比べ、この点で宗教のあり方が大きく違っていると感じた。宗教を信じるということは個人の意志の上にある行為と考えられているようだった。ある日10代の男の子が初めてミサに参加した。その時のメンバーの歓迎ぶりは熱烈で非常に温かいものであった。ミサへの参加者は高齢で少数になっている。牧師になる人も減っていて、この教区の

牧師は日曜の朝、ここの教会でミサをし、夕方6時から別の教会でミサをすと言っていた。地域によっては隔週にしかミサの開かれぬ教会もあると聞いた。日曜日には必ず教会のミサに参加するという人が激減しているようだった。

ブライトンの町では元教会の建物がパブとして使われていた。元々信者の少ないマイナーな宗派の教会の信徒が、信徒団体を解散するとき建物を売ったとの説明を聞いた。信者の少ない宗派の教会は人が集まらなくなり、庭に草が生い茂り管理が行き届いていない教会の建物もいくつか見かけた。浮浪者のシェルターとして使われることもあり、あるメソジスト教会は地元の人々のカルチャースクールにサービスの主力を移そうとしているようにうかがわれた。教会の変化を見て、庶民レベルで宗教離れがものすごい勢いで進んでいるという実感があつた。

興味があつたので、出会う人ごとに「なぜ英国で宗教離れ、教会離れが進んでいるのか」という質問を發した。それに対しては曖昧な答えが返ってくるが多かつた。中の1人に、このように答えてくれた人がいた。「今私たちはキリスト教会に、我々の生活の中からフェードアウトしてもらふことを望んでいる。今キリスト教を信じている人は尊重するけれど、後の世には教会がなくなることを望んでいる。」というものだった。その理由として、「教会はずっと我々に、「人間の幸せは何か」、「人はどう生きるとういのか」などと人の幸福に関する疑問に答えを与え、私たちの生活をリードしてきた。しかしそれは、今の私たちの生活信条とそぐわなくなつてきている。例えば、男女同権や離婚や中絶、同性愛に対して、教会のリードが我々の生活信条と違つてきている。教会の教えに代つて、今私たちは人権という新しい思想を見いだした。この信条に照らして自分の生き方を決定する方が、自分たちの生き方に近い

ことを感じている。現代人は教会の發する信条に従わない生き方を選択し始めているのではないか。」というものだった。このアイデアをすぐさま検証をすることは難しいが、私には一つの方向を示唆する考え方のように聞こえた。これはさらに考えてみなければならない問題だと考えている。

(2) 死の排除と環境問題

英国人はヴィクトリア時代に壮麗な墓を建てたが、現在建てる墓は非常に簡素なものになっている。多くの人は遺骸を火葬にし、メモリアルパークの花壇の花の下に火葬した骨灰を埋めるという簡素な埋葬をするようになった。そしてその上には、プラスチック製や石製の銘板である小さなプレートを建てるだけである。墓に参る習慣も消えており、葬式にも死者に強い絆を自覚する人だけが参列する。以前は広く行われた服喪の習慣もなくなつてきている。

死が日常の生活から排除される現象を、G.ゴラーは著書『死と悲しみの社会学』の中で、「死のボルノグラフィ」と名付けている。死が社会生活の中でタブーとなり、ヴィクトリア時代の「ボルノグラフィ」と同じ扱いをされているという主張である。死が社会的な重みを失つて、社会から隠され、家族など近しい人のプライベートな現象として扱われている。

火葬することで、棺となる樹木の伐採を防ぎ、埋葬地として使われる土地資源を浪費しないこと、結果的に散骨の林を育てることのように、墓が環境問題と関連づけて考えられることも、イングランドの墓離れを奥深いところで助長している。

VI. まとめ

以上述べてきたように、英国では、教会の庭の墓地にかわつて共同墓地や公営墓地で埋葬が行われるようになった。さらに火葬が導

入され、墓石を建てない埋葬が主流になってきている。その背後には、人々の意識が教会から離れていること、人の死が社会生活の中で相対的に重要性をなくしたことがあると考えられる。

(香川大学経済学部)

【文献】

稲田道彦「イギリスの宗教と墓地の変化」(『死の文化史と宗教』, 香川大学, 1996), 173～190頁。

稲田道彦「英国のcountrysideの生活」, 香川地理学会会報21, 2001, 44～50頁。

稲田道彦「英国地方都市の墓地の変貌—Brighton市を事例に—」(歴史環境を考える会監修『歴史環境を考える』, 美巧社, 2003), 166～186頁。

鯖田豊之『火葬の文化』, 新潮社, 1990, 206頁。

G. ゴーラー著, 宇都宮輝夫訳『死と悲しみの社会学』, ヨルダン社, 1986, 227頁。Gorer, G., *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain*, Cresset Press, 1965, 184p.

Changes in Religious Attitudes and Cemeteries in Southern England

INADA Michihiko (Kagawa University)

This paper examines recent changes in religious attitudes by focusing upon the change of graves and cemeteries in and around Brighton, southern England.

In the history of graves and cemeteries in Brighton, there were two major turning points. The first was the promulgation of the law in 1853 which stipulated the movement of cemeteries from the inner city to the suburbs and the prohibition against any new cemetery building inside of the city. In that year, the churchyard of the Church of St. Nicholas and its two accompanying cemeteries (Fig. 2; point 1) stopped any further interment and the interment site was moved to the parishioners' new cemetery which was opened at the eastern suburb (point 3). The other four cemeteries were also established in this area after the mid-19th century. One was managed by another parish church, and one was operated by a company named Brighton Extra Mural Company. Another was the Jewish Cemetery and the other was operated by Brighton city. These cemeteries have changed recently. Three cemeteries, that is, the two parishioners' cemeteries and the company's one went bankrupt for the shortage of customers; one parishioners' cemetery sold the rights to an American funeral company, and the other two cemeteries handed over their properties to Brighton city.

The other turning point is the start of cremation. Since cremation became popular after the Second World War, bone ash has often been buried in the ground under the flowers of a memorial garden, on which only a small plate is set. People also have the option of having their ashes scattered in the woodlands or fields. In Brighton, there are two crematoriums nearby. One is run by Brighton city, and the other by the aforementioned American company. Whereas the city crematorium recommends environmental-friendly ways of treatment, the company is eager to keep the memorial garden beautiful where the bone ash is buried.

The author investigated the two graveyards at the rural village of Falmer in the suburbs of Brighton. In the 18th century, the churchyard had been the place where the dead were buried. Few grave-stones remain, since wooden crosses of graves were lost in the past. A cemetery was established probably at the end of the 19th century near the church, which was donated by its landlord. After the both places were used for several years, the cemetery has been the main graveyard.

It appears to the author that English people wish to distance themselves from Christianity recently. The death also loses its social importance. These religious attitudes are reflected in the change of graves and cemeteries in England.

Key words: cremation, churchyard, cemetery, Christianity

稲田報告コメント

中 川 正

私がキリスト教墓地のフィールド調査を行ったのは1980年代のことであり、また調査地域もアメリカ南部であったので、現在のイギリス墓地の実態報告を聞き、その違いには驚いている。1980年代アメリカにおいて火葬はまれであったが、1998年におけるアメリカにおいても火葬率は26%に過ぎず、70%を超えているイギリスとは事情が異なっている。アメリカとイギリスの差異は、ここ四半世紀において、ある程度一貫した傾向を示しているようである。

今世紀になってからの両国の世論調査結果を見ると、イギリスにおけるキリスト教離れが顕著であることは明らかである。神を信じる人の割合はアメリカでは95%であるのに対して、イギリスでは61%である。天国の存在を信じる人の割合は80% (米) と50% (英)、地獄の存在を信じる人の割合は70% (米) と46% (英)、毎週教会に行く人の割合は40% (米) と13% (英) と、両国の差が顕著である。近年におけるこの差異が、両国の埋葬形態の差異に反映しているように思われる。

もとより、両国ともプロテスタント信仰を伝統としている点では共通している。プロテスタントにおける聖書解釈には、根幹となる部分と、時代により変化が許される部分がある。プロテスタント教理では、キリストの再臨と死者の復活思想は中心的なものである。キリストは信者を迎えに戻ってきて、そのときに死んだ信者の肉体はよみがえり、空中に引き上げられる (1テサロニケ 4:16~17)。この教理自体は時代と場所を超えるものであるが、その思想を埋葬形態に反映させるかどうかは、時代と場所により異なる。キリスト

は「いなくが東から出て西にひらめくように」(マタイ24:27) 東から現われるので、伝統的にイギリスでもアメリカでも、遺体は東に向かって起き上がるように、足を東に向けて埋葬するのである。私が調査を行ったルイジアナにおけるプロテスタント墓地では、大多数が足を東に向ける埋葬をしていた。

また、火葬が許されるかどうかに関しても、時代と場所のコンテクストにより異なる部分が多い。アメリカ南部においては、火葬は罪であると教えるプロテスタント教会が多い。それは、聖書に火葬を禁じる箇所があるからではなく、火葬自体が無神論を積極的に表明する媒体となってきているからである。特に、1960年代のカウンターカルチャー運動の中でキリスト教に対する反発が起こり、復活を否定するデモンストレーションとして火葬が用いられた。それゆえ、教会は火葬を禁じ、火葬をする人々はさらに火葬や散骨を推進するという状況になった。

稲田報告によると、イギリスでは火葬後に遺灰をバラ園や芝生にばら撒くとのことである。これは、アメリカとイギリスの差を考慮に入れても、プロテスタント的土壌から考えると、積極的無神論の考え方がかなり浸透してきたことをうかがわせる。稲田氏による調査は、その現状を提示した貴重な事例を提供している。

イギリスにおける調査事例はゆるがない実地調査に基づく一次資料であるが、その解釈に関しては今後議論を深めていかなければならないであろう。たとえば、稲田氏は、墓地が人々を教会に結びつける重要な媒介であっ

たが、火葬の増加が教会との関係を弱体化させる要因となったのではないかと論じているが、果たしてその推論は妥当性を持つものだろうか。もとより、現在においても毎週13%の人が教会に行く。また、熱心な信者とはいえない人もクリスマスやイースターには教会に行く。教会はやはり人々を結び付ける重要な制度であり続けているのである。これに対してプロテスタント墓地は、一年を通して、特定の行事を通して人々をひきつける機会をほとんど持たない。仏教寺院が墓地や仏壇や位牌を通して檀家を自分たちとかわらうじて結び付けている日本の現状を見ると、同様の類推をイギリスのキリスト教に適用する誘

惑に駆られることは理解できるが、西欧社会におけるキリスト教の浸透度は、シンクレティックな日本の伝統的信仰の延長線上に置くことはできない。私自身イギリスの調査をしたことはないが、キリスト教は、脱宗教化が進んだ現在のイギリスにおいても、人々の日常生活に、ある程度実質的な影響力を保持し続けているのではないかと私は推定している。西欧における墓地景観は、単なる社会的景観というよりは、「宗教」景観としての意味合いは強く、その視点からさらに吟味を加える必要があるだろう。

(三重大学人文学部)

稲田報告についての座長所見

土 居 浩

かつて宗教施設内あるいは近隣にあった墓は、都市内の埋葬が禁止され郊外へ移転を求められ、公共墓地も含めて様々な墓地が運営されるようになり、ついには墓を建てないことを選択する人すらも現れた。英国南部の事例を紹介した稲田報告を聞きつつ脳裏に浮かんだのは、まさに日本で19世紀後半から20世紀末にかけて展開した歴史的展開であった。日本では1873（明治6）年に火葬が禁止され、1875年に解除される。その顛末および背景については牧原憲夫（『明治七年の大論争』、日本経済評論社、1990年）や西野光一（『明治六年の火葬禁止令とその背景』、『アジア遊学』第38号、2002年4月）の研究を参照してもらいたい。ここで興味深いのは、まさに禁止と解除の狭間である1874年に、英国火葬協会（当初はThe Cremation Society of England、現在はThe Cremation Society of Great

Britain）が創立されたことである。当日も座長として議論進行のため指摘した点だが、ここでは同協会のウェブサイト（<http://www.srgw.demon.co.uk/CremSoc/>）に抛りつつ、イギリスにおける火葬の位置付けについて、再確認しておきたい。

英国火葬協会は、火葬の意義としてまず「衛生的」であること、埋葬よりもコストがかからないことを挙げている。そして宗教的重要性を持っていない（原文は“Cremation has no religious significance”）、すなわちキリスト教の教義に矛盾しないことが強調されている。このような啓蒙活動の甲斐あってか、イギリスの火葬率は2002年の統計だと約70%であり、同じく2002年の統計であるフランス約20%、アメリカ合衆国約27%と比べ、極めて高い。死体処理方法に関して、イギリスは欧米諸国の中で少々特異なのである。つま

り、イギリスの事例からヨーロッパ全体の傾向を導くのは困難であるし、ましてや「キリスト教世界」であるからと「欧米」を一括し〈西洋〉的傾向を指摘するのは、実質上無理である。

当日の中川コメントでは、稲田報告がイギリスの事例を紹介しつつ、ややもすれば〈西洋〉全般へと一般化しそうな口調に対して、アメリカの事例を論拠に〈西洋〉の分節化が強調された。つつい「欧米」あるいは「キリスト教世界」と一括しがちな傾向は、反省しすぎることはないほどに近年さらに拍車がかかけられていると土居は常々感じている。「一神教の世界」などという表現は分節化を放棄した最たる物言いであるが、墓や火葬といった具体的事象から接近し丁寧に分節化する手法を、稲田報告および中川コメントが示してくれたとすることができるだろう。

今回は、日本における近年の近世考古学的墓標研究を、単に座長が言及するだけだった点は残念である。その研究手法に刺激された、たとえば庚申塔の歴史的変遷を東京23区および周辺自治体を通覧する形で提示した石神裕之の研究（「近世庚申塔にみる流行型式の普及」、『歴史地理学』第210号、2002年）

などは、稲田報告と絡ませ議論を試みたい動向である。後日に期したい。

最後に、会場からの質問が皆無であったことに取返して言及しておく。もちろん質問の有無がそのまま報告の是非を決めるものではない。むしろ座長としては、何故このような面白い報告に対し無反応なのか、その点こそが疑問だった。直前の「風水」報告では、会場からの活発な質疑応答があったにもかかわらず、である。ひょっとすると、座長が知的興奮を堪能できるように、会場は配慮してくれたのかもしれない。事実、土居は発言の途中で何度か「そうだ、座長だった」と思い出さねばならぬほどに、気がつけば「火葬」や「墓地」について熱く語っていたのである。無意識のうちに、会場へ発言させぬよう、何らかの圧力を与えていたかもしれぬ。そうであればこの場を借りてお詫びしておきたい。やはり歴史地理学界で墓地へ関心を持っている人物は稀であり、なればこそ土居のような若輩が座長をすることになったのである。土居にとっては至福の時であったことを明言し、座長所見としたい。

(ものつくり大学)